

産業カウンセラーの存在を知ったのは、平成19年(2007年)私が勤務する明電舎沼津事業所に相談室が設置されたという社内アナウンスであり、その相談室のドアを叩いたのがカウンセリングとの出会いであった。その時の産業カウンセラーとの面接体験が鮮烈な印象となり、その後、養成講座を申込み、

ナビゲーター

産業カウンセラーになるための自己研鑽の日々がスタートすることになった。勉強を始めて驚いたのが、産業カウンセラー養成講座の教科書に、私が勤務している明電舎の社名が載っていることだった。

明電舎は、1950年代後半から1960年代前半にかけて日本に産業カウンセリング

産業カウンセラーの現場から

相談者の思いに
共感して伴走する

38

今も変わらない現場の悩み

を導入した企業の一つとして、日本電信電話公社(現NTT)、国際電信電話(現KDDI)、松下電器産業(現パナソニック)、日本国有鉄道(現JR)などの大手と並び記載されている。このことを知った当時は、協会の教科書に載っている以外の情報もなく、私自身教科書に載るようなことになった経緯や、当時の活動の詳細については知るすべがなかった。

その後、十数年の月日が経ち、私は社内では安全衛生を担当する部署に配属となった。直接の相談対応こそ行っていないが、ストレスチェックを始めとするメンタルヘルスの企画や「健康経営」に関わる業務を担当すること

生まれる前に活躍した先輩

になった。それが動機となり、国立図書館の文献複写サービスを利用して文献を取り寄せ、明電舎が当時どのような活動を行っていたのか、詳細を知る事ができた。

産業カウンセリング読本(社団法人日本産業訓練協会1961年発行)には、明電舎の菅内秀夫さんという方が、昭和32年(1957年)に品川工場に相談室を開設したとあった。当時の従業員が抱えていた問題や背景は今と本質的には変わらず、上司部下の悩みから退職の問題、家庭不和の問題、今で言う介護やセクハラ等、現在でも見掛ける問題ばかりだった。「職場の明朗化」は今でいういきいき職場に通じ、従業員への福祉が、生産性

につながり、その活動に対しトップが理解を示し推進していくところは、まさに「健康経営」の原点と感じた。

私が生まれる前に活躍した先輩カウンセラーの活躍を読み、今も変わらない産業現場の悩みを知ることができた。菅内さんがどのような人だったか直接知ることはできないが、当時の大変な苦労や、自身の対応力を向上させるべく社外のカウンセラーと学習を続けていたのだろうと、容易に想像がついた。今回、自分が勤務している会社の大先輩となる産業カウンセラーについてももう一度光を当てると、自分も産業カウンセラーとして、何かしらのものを会社と社会に残していけたらと感じている。

【日本産業カウンセラー協会中部支部会員
(明電舎勤務)産業カウンセラー 酒井卓也
(火曜日に掲載)

